6月11日掲載

広　告

すべては日本の健康を守るために

日本医師会は国民に過不足のない医療が提供できるよう、国に適切な医療費の確保を求めています。

世界有数の長寿国・日本を支えている、高度できめ細やかな医療体制。
その中心で活躍する日本の医師たちは、それぞれに困難な事情や課題を抱えながらも、真摯な思いで患者と向き合っている。

地域では“退院後問題”にも苦慮

循環器内科医　五十嵐知規氏

心臓が大きなダメージを負うと、歩行や食事など日常生活全体が困難になり、介護が必要となります。しかし、もともと独居だったり、高齢者世帯で「老老介護」の状況に陥ったりと、自宅でのケアが困難なケースが多々あるのです。持続的な酸素投与や胃ろうが必要になると受け入れてもらえる施設は限られ、なかなか入ることができません。そのため、ソーシャルワーカーなどと連携して、よりよい療養環境を築けるよう努力しています。

私が働く秋田のような地域では医師不足も深刻です。このことは医師の負担を重くするだけでなく、入院や救急の受け入れを制限せざるを得なくなるなど、患者さんの負担にもつながるため、大変心苦しく感じています。

心身ともに過酷な“生命の現場”

産婦人科医　前田津紀夫氏

周産期医療においては、いくらベストを尽くしたとしても、尊い命が失われてしまうようなケースをゼロにはできません。しかし、そうした事態が生じると医師には厳しい目が向けられてしまいがちです。私たちの地域医療圏ではこの20年で、かつて10人以上いた産科の開業医が5人にまで減少していますが、そうした事情も影響しているのではないでしょうか。

昼も夜も関係なく呼び出されることもあって、心にも体にもタフさが要求される診療科だと感じますが、それでも続けていられるのは、つらさを上回るだけの「やりがい」があるから。私はこれからも助産師らと力を合わせながら、全力で生命の現場に立ち会い続けたいと思います。

日本医師会
Japan Medical Association
http://www.med.or.jp